
サッカー部記録書

紅葉饅頭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サッカー部記録書

【Nコード】

N3323L

【作者名】

紅葉饅頭

【あらすじ】

サッカー部のマネージャーからの視点でかいています！

一、大会にしよう(前書き)

初めてだから『ん?』と思うところがあると思います!!
それと

いきなり始まりますので混乱すると思います?

本当すみません!!

「、大会にしよう」

「私、やるよ！！！！」

手を伸ばして言った

「まじでか！？」

部のマネージャーなんてやったことはない

どっちかと言うと

スポーツは実戦してやるほうだ

「ありがとな」

サッカー部キャプテンの泉 まもる君は満面の笑みで走り去って行った

ただ

泉君ともっと話すキツカケが欲しかったただなんて、勇気のない私には絶対言えないだろう……………

「瀬川 秋です！！！！」

サッカー部のマネージャーバリバリ頑張りますので、どうぞよろしくお願いします！！！！」

……………と言って数ヶ月

部員とは仲良く話せる子もいればあまり話さない子もいた
今日もいつもどおりに練習のサポートをしていたある日だった

一人の部員が一つ提案した

「なあ泉！！そろそろ大会のじきだよな…また出ようぜ？」

言い出したのは泉君の幼なじみの、新野 いちる君だった

新野君は熱血な泉君とは違い、落ち着いていて優しい性格で、クラ
スの女の子達からはひそかな人気をつかんでいた

「おれも出たい！！！」

泉君がはしゃぎたてる

しかしほかの部員はそうは思っていないかったみたいだ

「ちよつとまでよ！！本気で大会でるの??？」

「前回、おれたち一回戦で敗退 ボロマケしたんだぜ!？」

「もう あんな恥ずかしい思いはしたくねえよ」

かえってきたのはブーイングの嵐だった

……まずい！

チームのふいんきが悪くなってしまっている！！

ここはマネージャーがなんとかしなくては！！！！

……と思っていたのだが…

「大丈夫！！今の俺達ならやれるって！」

泉君が声を張り上げた

「そつだよ！！たくさん練習してがんばろう！！？あきらめるのは早すぎるんじゃないか？」

続けて新野君も声を上げる

…チームのふいんきを和らげなくちゃいけないのはマネージャーの仕事なのに……

私はなにもできなかったな…やっぱりいずみ君達はすごいや…！！！！
ようし！！と自分で気合いを入れる

「みんながんばろう！！私もサポート頑張るから！！みんなで大会でようね！！！」

私も張り切って声を上げた

しかし私はきずいていなかった

泉君も新野君もきずいてはいなかったらう

ほかの部員達がチームをはなれようと決意していたことを

一、大会にでよう(後書き)

なんか

めっちゃ変な終わり方だな

(|)

ごめんなさい!

次はまたいろんな人物を登場させたいと思います!!!(*^o^*)

一、巻き戻し？（前書き）

ひじょうに最初らへんがくらいです……！

もうしわけないッッッ……！

一、巻き戻し？

部室のつくえの真ん中には数枚の白い紙がおかれてあった

……うそでしょ!!？

足がふるえているのが自分でもわかった

退部届け

パニックになる

私は泉君達になんていえばいいのだろうか

「せーがわっ!!なにして……えっ!!!？」

泉君は私の表情をみてあわてふためく

「あっあれっ…!!?!?おれ……なんかして…あっいやっ………その」

「う………うわぁ~~~~~泉く~~~~ん!!!……!!」

きずけばポタポタと涙を流しながら泉君に白い数枚の紙を突き出していた

「……………えっ……………これ」

泉君の顔がだんだんくもっていった

どうしよう……………どうすれば……………

マネージャーなのに

なんにもできないだなんて……………

すると泉君はパツと顔をあげ

「泣くな！！！！瀬川！！！！」

悩んでも仕方ない！練習やろーぜっ！！！！」

と、ニカツと笑った

「……………！！！！」

私はおどろきをかくせなかった

……………すい……………

強い……………泉君は強い人間だ

「……………うんっ……………!!」

私は両手で涙をぬぐう

確かにないてたってなんにも始まらない

ホントはスツゴク辛いけど……

よしっ!!!!

私も強くならなきゃ!

泉君みたいに!

「……………で……何人ぬけたんだ……………?」

泉君が私に聞いてきた

………そういえばそうだ

いったい何人ぬけたんだらうか………

二人は白い紙の枚数を数え始めた

「……………9枚……………ってことは9……………人……………?」

残りの部員数は

…… 7人……

4人たりない……

二人はまっさおになった

どこからどうみても不健康男女二人組である

そんな不健康男女二人組のちんもくをやぶったのは一人のようきな部員だった

「よう！……泉！……サッカーの練習やつぞ！……」

彼の名は野々 改君

適当で（おい）明るい性格である

いつもおもしろい事ばかり言っているのだが、本人は自覚していないようだ（誰かが「野々はただのアホなんだよ」といつていた）

私は野々君にも白い紙を見せてあげた

……が

かえってきたのは意外な反応だった

「あっちゃあ〜やつちやつたな　……！！」

………ん？

「まあまた部員集めりやいいだろ！！ん〜…じゃ今日は部員集めか！！大丈夫だつて！！！！サッカー本気で好きなやつなんて探せばどこにだっているさ！！！！」

……の…野々君…すごい……

泉君はハツとなってつづけた

「…あつ！！ああ！！そうだな！！！！なつ瀬川っ！！」

「…う…うん！！！！」

たしかに野々君の言っている事はまちがいでない……（……はず……）

「ようしっ！！！！やりますか！！！！部員集め！！！！」
私達はいきおいよく（？）部室をとびだした

二、巻き戻し？（後書き）

まさかのマネージャーがなく!!

まだ始まったばかりなのに!!!

新しく来た新キャラ、野々君もどうぞよろしくです!

どんどん新キャラ増やしていきますっ!!

三、一人目！（前書き）

更新しました！！

またまた新キャラ増やさせてもらいました！

サッカーは11人は絶対必要なのでごちゃごちゃなりそうで怖いです？

三、一人目！

昨日私達はわかちあったはずだった

大会にでるんだ！

なのにみんなはちがった

たしかにサッカー部は前回の大会でカッコ悪い負けかたをして、たくさんのブーイングをうけた

あれからいずみ君達は次の大会に少しでもものぼれるように日々かさず練習をしてきたのに

みんなはあきらめていたのか

『はあ』

ため息がでる

パソコンクラブからパソコンを一台かりて私は部員集めの広告をつくる

部員求む！

ふとい赤の字で大きくしあげる

いまごろいずみ君達は残りの部員達に説明しているのだろう

みんなはどう思うのだろうか

やる気をなくしてやめると言いたさなければいいのだが

そんな不安をかかえながらキーボードをたたいてみると、奥からキヤーキヤー言いながらパソコンクラブの子が私に話しかけてきた

『秋ちゃん!!しまでら君が呼んでるよっっ!!!超かっこいい』
』

しまでら君とはサッカー部の部員のひとりだ

しまでら しゅう君

この学校の（言い忘れたけど私達の学校はさかき中学校です!いずみ君も私もしんの君、野々君、しまでら君も中2年生だよ よろしくね）

女子生徒のわだいの中心にいる人と言ってもいいかもしれない

クールでいつもツンとしているが心はとても優しい、いい人だ

そして、

とにかくモテる!!

（三年生の間ではファンクラブもあると聞いたことがある す
ごい）

『いずみから聞いた 部員 へったんだな』

『うん みんな本気じゃなかったみたい』

悲しいけれど現実
受け入れなくては

『サッカーの試合 でれなくなりそうか？』

『わかんない』

『そっか』

しまでら君はサッカー部のエースだ

大会にむけて誰よりも本気なのははずみ君たちにはきずいていただ
ろっ

でも だから

『しまでら君！頑張って部員集めよう！！大会までに！』

うんっ！絶対に出る！！

残ってくれたサッカー部員達のためにも！

するとしまでら君はフツと笑った（後ろでカメラのシャッター音が
なったがこのさい気にしないことにする）

『そうだな ありがとうマナージャー』

そういつとしまでら君は部員を集めに去っていった

うん さすがは、さかき中を代表とするイケメンだ

笑顔がまばゆい

だけど私は

つと!!!

危ない!!!!

私は何を考えていたのか!

こんな大事な時に!!

頭の中に大きく出てきたその人物を追い出し、私は“部員求む”のデータの作成を続けた

『秋ちゃん秋ちゃん!コピー出来たよ!起きて〜〜!』

の声で私は我にかえった

えっ寝てた!?

外をみると日はすっかりくれていた

いずみ君たちはどうしているのだろうか!!

パソコンクラブの子からコピーされた広告を受け取ると、いそいで
部室に走った

『いずみ君ツツツ!!』

『?』

部室にいたのは一人の同い年の男の子だった

『せがわか サッカー部に入ることになった いろいろといずみ
から聞いたぞ? 大変だったな』

彼の名はつちがみ ゆう君

いずみ君ととても仲が良くて私もちよくちよく話したことはあつた
いつも冷静で天才的な頭脳の持ち主で テストはいつもトップが当
たり前

なのだが、

『つちがみ君も サッカーするの?』

まさかスポーツもしていただなんて!

『 まあな 』

つちがみ君は余裕の笑みをこぼしていった

おお !

そうとうの自信があると取っついていいのか!!? とにかくいずみ君のおかげで一人部員が増えた!

『ありがとう!つちがみ君!!!!』

私はおおげさにキラキラとしたまなざしできたいをこめる

『チームの頭脳は任せろ』

つちがみ君もそれに乗ってくれて、におうだちしてフンツと鼻をならした

そんなアホな情景をじくじくっつとふしんな目で見つめていた、いずみ君に私達はきずかなかった

『あ　あの　』

はいりずらそうに、いずみ君が言う

『!!!!!!』

私は驚く

な　なんて恥ずかしい!

『いずみか　遅かったな　』

『おう!さがしものみつかったぜ!!　で　二人ともなにやっ
てたんだ　?』

『 べつに 気合を入れていたんだ』

まじめな顔でつちがみ君は言う（彼はいつも、どんなときも冷静である）

『？ そっか！つーことでせがわ！！やったな！残り三人！！！』

彼はいつもの笑顔でニカツと笑う

そっだ

照れてる場合ではない！

残り三人！！

『ようし！！！残り三人よんで、サッカー部！優勝すつぞ ！！！』

いずみ君の声は部室全体にひびきわたった

大会まであと数ヶ月！

まだまだ時間はたっぷりある！！

『お ！！！！』

私達はいきおいよくこぶしをあげた

三、一人目！（後書き）

しまでら君が超モテる事と、せがわとつちがみ君がノリがよく（？）
イロイロと仲がいいことが伝わればいいかな と思っていたのです
が

わかりにくいな（――）
次は二人目を出すつもりです！！＼（＾　＾＊）

四、二人目！（前書き）

どんどん新キャラふやしていきます!!

がんばります

四、二人目！

『あとは紙コップと スポーツドリンク！！！』

今日は晴天！

土曜日である

私達の学校は数ヶ月後の文化祭にむけての秘密行事の打ち合わせのため、土曜日の練習はきょうせいの的に休みとなっていた

とゆうことで

私は親友のおおたに つくしと買い物に行くことになった（つちがみ君が入ってくれて私の心はルンルンだった 残り三人）

つくしは私に比べておとなしめの子で性格もおっとり ふわっとしていて女の子の中の女の子なのだ！！（私の自慢の親友だ！！）

『それにしても、あきがサッカー部のマネージャーするなんて私びつくりしたなあ』

それは自分だってびつくりしている

もともと活発な子だとまわりからはいわれていたから

『あき 女の子らしくなっただじゃない！』

『つくし それどーゆー意味 ？』

『あはは！冗談！！！ あきつてさ 』

？

つくしは途中で言葉を切るとだんまりになってしまった

『つくし？』

『あっいや なんでも 』

つくしはまたもやだんまりになってしまった

そこまで言っというてなんでもないわけはないだろう！！

『つくしっ！！！！』

私はつくしと向き合つと真剣なまなざしで言った

『私達親友よ！？はつきり言って！』

そう言つとつくしは少しためらつて

『あきさ なんでサッカー部マネージャー入ったの！？』

へ？

『なんだ！そんなこ 』

と！　　と言おうとしたがピタッととまる

だって

わ　　私がマネージャーになったのは　　！！

もう、皆さんだけにぶっちゃけよう

私はいずみ君が好きなのです　　（　ん？　もしかしてばれてる
？）

でもそんなこと恥ずかしくて言えるわけがない！

活発でいつも『男の子？』と間違われるほど男まさりなわたしに好
きな人だなんて！

マネージャーでも『しょうきー？』と言われていたと言うのに！！！！

とりあえず返事を！！

と思い

『私もサッカー好きだし、が　頑張ってる皆かっこいいし　私だっ
て女の子らしくならなきゃ！　　みたいな　　』

と言った

まあまちがいでないし

『　　そ　　そっか　　』

一体つくしはどつしたのだろうか？

するとつくしはパッと明るく

『さあっはちく買って帰るっ！！..!』

といた

『うっ』

私もふしんに思いながらも返事をした

月曜日

授業を終えると私はいつもの通りに部室に向かおうとした

『そのっ あきさんっ！！..!』

途中で呼び止められた

後ろをむくとおとなしそうなこがらな女の子が立っていた

『たしか くすのき ふゆな さん？』

『はい そつです..!』

ホッ

よかった 覚えていた！

くすのき ふゆなさん

彼女とはあまり話したことはないのだが、物静かでおしとやか花のような子！！と男子が騒いでいるのを聞いた（例えるならば、つくしをもっともっとおとなしくした子である）

『あの いずみ君ってサッカー部キャプテンでしたよね』

彼女は少し頬を赤らめて言う

なんでいずみ君の話し ？

『そうだけど』

『あのっ！部員 四人足りないんですよね！？』

！！！もしかしてマネージャー希望！！？

もやっとしたものが広がる

やだ なんで！？

私は必死でそのもやもやを取り外そうとする

『あきさん ？』

『あっ なんでも いやっ！一人入るって言うてくれた子がいて』

『なら残り三人ですかね　？』

『そうなるね！』

『私　サッカー部入ります！！！！』

へ？

『入る！！？ふゆなさんが！！？』

わ　いきおいあまってひどいことを　！

『あはは！私これでもサッカーやるんですよ』

とふゆなさんは笑う

『あの　私、入っていいでしょうか？』

『そんな！！それは当たり前だよ！！でも！！』

『でも？』

『いや　意外で　』

私は心のそこからびっくりしていた

おとなしく、こがらで、『女の子！！！！』なふゆなさんが
！

『よく言われます!』

そしてふわっとした笑顔で彼女はまた笑う

本当にこの子はサッカーをやるんだろうか???

私は(とっても失礼だけど)ふゆなさんが激しく体を動かしてボールを追いかける姿を想像することはできなかった

四、二人目！（後書き）

自分でもつくしちゃんとおゆなちゃんの性格の違いがわかりません
！？

つくしちゃんよりおゆなちゃんがおとなしい とゆじじいどで

五、新メンバー（前書き）

遅くなつてすみません？

小テストとかイロイロ忙しかったです???

次からはちゃんと報告しますね？

五、新メンバー

『 と言う訳で 二人ともの実力がしりたいからこれから誰か相手をしてもらおう』

いずみ君が言う

すると新しく入ってくれた新メンバーつちがみ君とふゆなさんがコツクリとうなずく

『だれかいないかあ？』

いよいよだ

二人ともの実力を確認できる時がきた！

つちがみ君はいつも勉強ばかりしている子だと思っていた（いつもトップだし）

ふゆなさんはスポーツなんて興味なさそうな子だと思っていた

二人ともの実力が知れる

こんなにワクワクしたことはない！！！！

『はい！僕やってもいいよ？キャプテン』

突然やんわりとした声がひびいた

彼はあらき はくや君

おだやかで優しくてふわふわした男の子だ

そしてこの子もまたすごくモテる！……！（しまでら君とおなじく、三年生の間ではファンクラブがあるそうだ やっぱりすごい）

『あらき！やってくれんのか！？』

『うん！いいよ〜ちょうど体動かしたかったしね〜』

『サンキューあらき！なら相手は つちがみでいいか？』

『うん！』

『あらき か、お手柔らかに頼むぞ』

『ふふっまたまた〜』

そんなことを言いながら二人はグラウンドに飛び出していった

『さて あと一人 誰かいない』

か といはずみ君が言いかけた時だった

突然部室のドアが、バンツとなる

『おっ遅れてすみませんツツツ！……！』

『お、いだち！おそかったな！』

『あっあっあのっ！すみません　！』

ぜーぜー言いながら彼は声をしぼりだした

彼の名はいだち　よう君

ここのサッカー部のゆいいつの一年生である

おどどとしているわりにはなんでも出来て、とつてもたよりになる、こがらな男の子だ

『！そっだ！！！いだち　やってみないか！？』

『　へ？』

いだち君はまだ状況をはあく出来ていないため私が説明してあげた
(マネージャーの仕事！！)

『ええ！俺　やってもいいんですか　？』

『あの　よろしくお願いします！』

『あっいえいえ、おかまいなく　』

うっん　ふゆなさんもいだち君もどっちも相手の事を思っただけか
えめになりそう　と思っってしまったが

まあそこは二人に任せるとしよう

『ようし！！！とりあえず相手が決まった！』

いずみ君も二人の実力を知りたいのか意気込んでいる

『みんなグラウンドに集合！！！四人はストレッチちゃんとしてね
』！』

私も声を張り上げる

サッカー部、部員たちはぞろぞろと部室からぬけていく

いよいよである！！！！

まずはつちがみ君とあらき君

二人ともよくストレッチをしたあと、フィールドの真ん中に立った
ふゆなさんといだち君はストレッチをしながら横目でフィールドに
立つ二人を見ている

二人とも 頑張って！！

ピ ツ！！

私は二人に向かってフエを思いっきりふいた

五、新メンバー（後書き）

次はいよいよ実力確認です？

頑張ってはやめに更新させたいです？

六、実力確認一（前書き）

更新しました？

いよいよつちがみ君とあらき君の初バトルです！

六、実力確認一

私のフエと同時に二人はボールに向かって走り出す

『ふふっ』

あらき君はかるやかにボールを自分の足元においた

『へえやるじゃないか』

『それはどうも』

あらき君はボールをキープしながら相手のゴールへと駆け込んでいく

『させるか!』

つちがみ君はボールめがけて思いっきりすべりこんだ

『うわ!』

ボールは空高くとんで、つちがみ君のところへ

あらき君もすぐに体制を整えてつちがみ君とボールを追いかける

『すごいね』

『ナメてもらつと困るな』

『それはっ僕もっおなじだよっっ』

あらしき君はつちがみ君のボールをつばおうとタックルをしかけた

が

それを先に読んでいたのか、つちがみ君は急にスピードを落とす

『なっ わっっ!!!』

ずさあぁ!!!

あらしき君ははでにころんでしまった!

『もらったな!』

すぐさまつちがみ君はゴールへ駆け込んでいく

シュート!!!!!!

だれもが入ると思われた

が

ばしッッッ!

そのままいけばゴールに入っていたであろうボールはあらしき君のお腹で阻止されていた

『ふふっなめてもらっっちゃこまるなあ』

すいっ!!!

あらしき君はすぐに体制を整えて自分のゴールまで走ったんだ！！

『 よし いくぞー！ 』

するとあらしき君はボールを相手のゴールまでけた

超ロングシュートだ！

『 追いついてみせるっ！！！！！ 』

つちがみ君も自分のゴールに向かって走る

しかしボールは急カーブ！

再びあらしき君のもとへ帰ってきた！！

『 ！？なんだと！！！！！ 』

『 おかえり ボール君 』

『 ツツツくそうー！！！ 』

つちがみ君はあきらめずにボールのもとへ走る

『 いっけ~~~~~！！！！！ 』

つちがみ君が体制を整えた直後あらしき君は再びロングシュートをく
りだした

ばしゅっっ！！！！！

ゴールイン！

ピーッ

私は慌ててフエをふく

勝者はあらか君となった

『ふうっ　つかれたなあ』

『へえやるじゃないか　あらか』

『はくやだよ　よろしくっ』

『よくすばやく体制を整えることができたな』

『ん？　なんでだろうね』

そんな会話をしながら二人は私たちの元へ帰ってきた

『二人ともお疲れ様！！はいっドリンクとタオル！！！！』

『ああ、さんきゅ』

『どうも』

二人ともいがみ合う事はなく楽しそうに話している

よかった

みんなつちがみ君とあらしき君をとりかこんでさっきの試合について
もりあがっている

さあ次はふゆなさんといだち君だ!!!

『二人とも！準備はできた!?!』

私は振り返って二人を見る

しかし

二人ともまっさおな顔をしてふるえていた

『えっええ!?!どうしたの!?!』

するとふゆなさんは

『は はげしい 』

いだち君は

『緊張 してきた 』

そして二人とも一緒に

『自信 ない 』

私はそんな二人を無視してグラウンドへと押し出した

六、実力確認一（後書き）

次はふゆなさんVSいだち君です！

意外な展開になってきますんで読んでもらったらうれしいです？

初バトルなのにキャプテンを出さないですみません？

ごめんよ！いずみ！！

七、**実力確認**・**実力発揮**!! (前書き)

やっと更新できました!

次の更新はテストがあるので遅くなりそうです /) + x + (/

七、実力確認二・実力発揮！！

私から無理やり押し出された二人はしぶしぶ、グラウンドの真ん中へと歩いていった

『二人ともきばっていけよ～～～！！』

いずみ君の声は届いているのか、いないのか

ピー ……！！

私は思いつきりフエをふく

『いきますよっ！！…！！』

いだち君はいきなりボールめがけてスライディング

『きゃあー！！』

それにおどろいたのかふゆなさんはひめいをあげる

『うえ！？つすみません！！』

いったい何をやっているのだろうか

『こら つ！！二人とも、もっとボールにくらいつきなさいああい

！！』

ガマン出来ずに私は思いつきりさげぶ（いずみ君達がビクッとなっ
た ああ ）

『すみません』

いだち君は相手ゴールへとずんずん進む

そのあとをボクっとながら見ているふゆなさん

『 どうしたんだ？動かないじゃないか』

タオルを首にかけてつちがみ君は言う
確かにさっきから立ったまんまだ

いったいどうしたんだろうか ？

いだち君も後ろをチラチラ気にしている

『よ よしっ！！』

ふゆなさんは何かを決心したみたいにコクッと頷いた

するといきおいよく走り出した！！

はやい！

いだち君もびっくりしていた

あっという間にボールに追いつき、そして

『いだちさん　　ごめんなさい!』

っと言ったと思うと、

クルクルっと回りはじめた

え？

ふゆなさんの意外すぎる行動に全員言葉を失った（当たり前前だけど
ね）

するとふゆなさんはいきなり大声をだした

『リボンシャワーああ!!!!!!!』

ええふゆなさん　!？

すると同時にヒラヒラとした物がふゆなさんを囲む

あれっ ふゆなさん リボン持つてる ？

確かにふゆなさんの手にはリボンが握られてあった

おかしいな

いずみ君達を見るとみんな不思議そうな顔をしている

よかった

リボンが見えているのは私だけじゃないみたいだ

ふゆなさんはそのリボンを華麗にあやつりながらダンスをおどっている

『 なっ 』

いだち君はとまどっている（ 当たり前だけどね ）

するとリボンはいだち君とボールをかこみはじめた

『 えっわああ！！！！ 』

リボンはそのままいだち君が持っていたボールをつばい、ボールはふゆなさんの元へと転がっていった

いだち君はリボンにひっかかりはでにころんでしまっていた

『いててて なんだ ?今のリボン 』

するとふゆなさんは一言

『私の必殺技ですよ』

とニツコリ笑った

必殺技 !?

いきおいよく走り出したふゆなさんはそのままシュート!!

ゴールインとなり勝者はふゆなさんとなった

彼女の手にはもうリボンは握られていない

『ふう 』

彼女だけがすがすがしい顔をしている

私はフエをふく事なんてまっさら忘れてしまっていた

みんな口を開けてポカンとしていた(あの冷静なつちがみ君とあま
り驚いたりしないあらしき君まで驚きの顔をしている レアすぎ

る！！)

『お　　おい　くすのき　　？今のは？』

いずみ君がおそるおそる聞く

『え？　何かしましたっけ　　？』

自覚ないのか？

『したよ！！あの　リボンシャワー　　？っての！！！！』

『えっ　ふつーに　必殺技　　ですよ？』

そしてちんもく

『　　あれ！！！！もしかして初めて見た　　とか　　！！？』

その言葉に全員がコクンと頷く

『えええ！！！！皆さんそれぞれの必殺技持ってないんですか！！？』

そして皆はコクンと頷く

『そ　　そんな！っそですよね　　？』

それはこっちのセリフである

この試合でわかったことは、くすのき ふゆなさんは実は凄い人物
だったということだけだった

七、**実力確認二・実力発揮！！**（後書き）

まさかのふゆなが一番強い

とゆう

次はまた新キャラ出すつもりなので！

見てもらったらうれしいです！！

その前にテストが

（へ）

八、三人 目？（前書き）

実はまだテスト期間中です!!!

勉強をしる自分!!

少しでも見ていってくれる神様方!!!

テストが終わるまで更新出来ないと思いますがまた見に来てくれたらうれしいかぎりです!!!

八、三人 目？

ピピピピ

うーん 眠い

重たいまぶたをこすりながら私は目覚まし時計のボタンを押した

昨日の実力確認は非常にビックリさせられっぱなしだった

まさかふゆなさんがあんなすごい必殺技を持っていたなんて！！

(今思えば私ったらホントに失礼な事を言っただなあ)

急いでご飯を食べてかばんをもって学校へと向かう

『よっ！おはようせがわ！！』

いきなり後ろからバンつとたたかれた

『いずみ君 朝から元気だねえ！！』

『おうつ！！！元気元気！！おれさ、昨日のくすのきの必殺技
超感動したんだ！！』

目をキラキラさせながらいずみ君は言った

『だからおれも自分の必殺技 頑張って身につけるんだ！！！！』

『 ふふっ 』

いずみ君 可愛いな

『 ？なんで笑うんだ ？ 』

『 うっん！！きっと皆も同じ気持ちだよ 』

『 だよなっ！！ 』

そんな会話をしているとキーンコーン と始まりのチャイムが
なってしまった

『 ええええええ！！！！ 』

二人とも真っ青だ（だってだって遅刻だよ！！！！）

『 うおお！！！走るぞせがわ！！ 』

『 う・うん！！いずみ君まって！！！！！ 』

『 ごめんなさい！遅れまし 』

教室のドアを思いっきり開けていずみ君は言った

教卓の前には先生と目つきの悪い、がらの悪そうな男の子が立って

いた

『遅いぞ〜いずみ、せがわまで!〜!』

『すみません!〜!〜!』

私達は急いで席につく

先生は続けた

『とゆうわけで 新しくこのクラスの一人となったおおのれ
い君だ!ほら、あいさつしなさい』

『 よろしく』

それだけ言っておおの君はすたすたと一番後ろの空いている席に向
かって歩きだす

『おいつおおの!〜!〜!ちゃんと自己紹介しろ!』

先生もおおの君に注意するが

『は? 別に知りたくもねえ奴の自己紹介なんてきく意味ねえし
』
と言った

うわあ これはとんだ不良が来たもんだ!〜!

『なんだその態度は!〜!』

『ちっ うげえな !はいはいわかりましたよ!!好きな事はサッカーです!!! これでいいんだろ ?』

おこっ
だれかさんの体がびくつと反応したが 今は気にしないで

『おおのっ!!--!』

先生はかなりおこっている
その時ちょうどチャイムがなった

ナイスタイミングである

『 まあいい 放課後、おおのは職員室へこい!』

転校当日に呼び出し !!--かなりまずいだらう

先生が教室のドアを開ける

『 ああ いずみとせがわも、放課後職員室だ !!--必ず来いよ』

そう言って先生は去って行った

あああ 私達もか

けど不思議と嫌な感じはしない
なぜだらう ?

『 あき、おはよう!!--』

つくしだ

『おはよう!』

『朝から災難だったね?』

『あ、あはは遅刻しちゃった』

『珍しいよね、あきが遅刻なんて!』

『えへへ やっちゃった』

そんな会話をしているといずみ君がやって来た

『せがわ、ごめんな!あの おれのせいで』

まずい いずみ君は自分のせいと思ってるみたいだ

『ちがうよ!いずみ君のせいじゃ』

『おれのせいだよ!!!巻き込んでごめんなッ』

『ちがっ』

『なんかおごる!』

『!』

え?

おじる！？

『 なっ いいかつ？ 』

いいかつて

『 え 』

『 なら放課後なっ 』

そういつていずみ君は友達のところにもどって行った

おじる

おじるって どこかに行って なんか 買って もらっ って

『 あき 良かったね 』

その言葉に私は我にかえる

『 えっ えっ あっ うん っ 』

つくしはボソッと saying

『 あき 本当 いいなあ 』

そんな言葉に私はききずかず一日中ぼ っと過ごすことになった

放課後私といずみ君とおおの君は職員室に集まった

みっちり怒られてしまった（が、私の頭の中はいずみ君との約束のことでいっぱいだった）

やっと話が終わり私達は解放された

『はあ、だり』

そう言っておおの君はすたすたとその場を去ろうとする

それを阻止したのはいずみ君だった

『おおの！ だよな？』

『ん？』

クルツと振り向いてくれた

『おれ サッカー部キャプテンのいずみ まもる！！！！えっとよろしくなっ』

『なんかよいかよ？』

うう 怖い

こんなこと言いたくないけど、苦手なタイプだ

『おまえ、朝の自己紹介でサッカー好きって言ってたよな!』

『おぼえてねえな』

『いやっ!言った!!--で サッカー部!入らないかと思ってさ
!--!』

私といずみ君はおおの君の反応をつかがう

しかし

『うっむい』

それだけ言って去って行ってしまった

や やっぱり怖い !

『残念だったね、いずみ君』

『 ん〜〜』

いずみ君はまだ諦めがついていないようだ

『さ 練習に戻ろっ?』

『 うん』

いずみ君は渋々といったようにその場をはなれた

八、三人 目？（後書き）

今までで一番ひどい終わり方だと思う！！！！

ショック（ ）

最近お店に行つてなかったから、久しぶりにお店に行ったらポスターにビヨン・カイルがいて、一人でめっちゃめっちゃテンション上がってました！！（馬鹿）
かっこよかった

あ そんなだけです

イナズマ知らない方々ホントにごめんなさい

小説とは全然関係ない話です！

九、おごってくださいってホントですか！？（前書き）

『を』に『』に変えました！

他にもイロイロ変えましたので……

これから時間があつたら前の小説も編集していきたいと思えます！！

丸、おじつてくれるってホントですか!?

「気合い…ですー!」

「き…気合い…?」

部活に戻った私たちは早速練習に取り掛かった

ふゆなさんから必殺技の事についてイロイロ研究しながら皆頑張ってる

…………ただ

私だけは部活の後が楽しみで仕方なかった(マネージャー失格である)

「なんだあ??顔、にやけてんぞ!」

のの君に指摘されて我にかえる

危ない!!私ったら!………そう思いながらもやっぱり顔がにやけてしまう

おじるって…やっぱり食べ物かな…?

好きな物だったらやっぱり残るものがいいよね…

イロイロと考えすぎていたら当然不安もよぎってくる

……まさか売店で……だったり……

やだー！そんなのー！！

でも……いずみ君、超鈍感だし……

恐るべき予感的中しないように私は祈った（マネージャーの仕事をしろ）

「すーとーっぴー！」

私は時間になったと同時に終わりを皆に告げる

「ええっ！……もう！？」

しんの君が言うが、私にとってはやっとかー！！……である（皆……こんなマネージャーでごめんなさい……）

それほどまでにいずみ君がおごるって言うてくれた事が嬉しかった

おまけに朝も話せた

こんな幸せでいいのかな……

そんなとき、ふとつくしの顔がよぎる

……………あれ？

「せがわー！！着替えてくるから待ってるよー！！！」

いずみ君の声でまた我にかえる

「…う…うん…！」

つくしが出てきた事を気にかけてながら、いずみ君に返事をした

「何何？キャプテンとなんかあった？」

「へえ…なるほど…？」

いろいろ冷やかされて恥ずかしかったので私も教室に戻り帰りの支度をした

「またせたな…！」

「ぜっんぜん待ってないよ…！！！」

「そおか？よかった！」

「ねえっ！！おごっってくれるってホントかなっ？」

「あんま高くないのな！！せがわ、何がいいの？」

「ん〜…じゃあ、テレビが欲しいっ！！」

「むりだ〜！！」

夕暮れの赤道に二人の笑い声が響く

なんか…ありがとう神様…

いろいろ冗談を言い合っていたらひとつの小さなお店に通リ掛かった

かわいい小物がズラリと並んでいる

「女子ってこんなの好きだよなあ…入るか？」

「うんっ！！」

私はいずみ君と一緒にお店に入る

ネックレス、指輪、小さいバックにあたたかい色のハンカチ

最近オープンしたのだろうか……

「なんかいいの決まったら言えよ」

「うん！」

私は近くにあつた指輪に目をやった

本物そっくりに出来ている指輪もあったが、目が止まったのはプラ
スチックの子供用の指輪

なんでかな……あたし、こつゆつおもちゃみたいな好きなんだ

スピードマークの深いピンク

奥でキラキラ光っている

可愛いな……

「いずみ君……あたし、これがいいな」

「えっこれって子供用だろ！？いいのか??」

「うんっ……！これがいいの！」

「………そっか?ってやつば駄目だよ……！これ、120円……！」

「……い……いずみ君、それでいいんだよ……」

「せがわぁっ……！おまえ……ちょっと気い使ってないか……?」

「ちがうって……」

その時だった

「じゃまだ…通らせる」

……！！！！

いけないっ！！店の通路で話していた

「すみませっ……」

慌てて道を開け、その人の顔を見た

………が

言葉が止まる

それはそうだ

だっておおの君だったのだから…

「おおの！！!?」

「あ…? わっ…てめえら!!!?」

なぜおおの君がここに!!!

もう一度説明するが、ここは可愛い小物が沢山おいてある小さなお店（指輪にネックレスに……!!!）

そしておおの君は転校初日に呼び出しという不良……！！

噛み合わない……！！

むしろ噛み合ったら気持ち悪い……！！

私一人、わなわなと震えていたらおおの君が口を開いた

「俺は妹の付き添い……」

えっ……妹……

おおの君の足元からひよっこり顔をだした小さな可愛い女の子……

「お姉ちゃんとお兄ちゃん……こんにちはわ……」

わっ……可愛い……

「うた……決まったら俺に言え」

「へえっうたって言うのか……いい名前だな」

いずみ君がしゃがんでうたちゃんに話しかける

「ありがとうお兄ちゃん……」

おおの君の足に隠れながら言う

懐いてるんだな……不良なんて考えられないや……

そんなことを考えていたら今度はうたちゃんから口を開いた

「…あのね…今さっきまで、れいちゃんとサッカーしてたんだよ！」

「！！！」

サッカー！？

おおの君の方からチツッと聞こえたが気にしない！！

いずみ君は目を輝かせながら

「おおのお！！サッカー部入れよ！！！」

…とすがる

「うぜ…俺はサッカーは暇つぶしにしてたの！！！」

「え ホントか？うたちゃん？？」

「なんでうたに聞くんだよ！！！」

うたちゃんは素直でいい子です……

「れいちゃん、サッカーだあいすきだよ！ねえれいちゃん？」

「……うた！てめ！！！」

いずみ君を見ると満面の笑み

うわぁ……………いずみ君……………絶対に指輪の事忘れてるね……………

私はかんっぜんに忘れておおの君を誘っているいずみ君をあたたかい眼差しで見守っていた

九、おじつてくれるってホントですか!?(後書き)

またまた変な終わりかたでごめんなさい) 、 、 (

秋がちよつと腹黒化してるな……

きおつけます) 。 。 ! (

十、好きな気持ち（前書き）

ふおお……！！

恥ずいな！タイトル！！

耳の病気でのがちまわっていました！

耳て……！！！！

まさかこんな痛いなんて！！！！（；、皿、）

ただ今痛み止めで痛みを制御してます（^| ^）v

十、好きな気持ち

「うた!! 早く決めろ!!」

「はっはいつ!!...!!」

「おおの! サッカー部へっ!!...!!」

「うるっせえな!! 俺はぜってえはいらねえ!!...!!」

.....あの〜

店の中で騒いだらまずいと思つのですが.....

さっきからずっとこの調子.....

皆かなり迷惑してるよ...

「二人ともっ!!...!!」

「今日はもう遅いから明日入部届けなっ!!...!!」

「話聞いてたか!!...!!? このバカッ!!...!!...!!」

~~~~~!!...!!...!!

我慢できないっ!!...!!

「いずみ君っ!!...!! おおの君!!...!! うるな

いっ!!...!!...!!」



……ああ……私が一番うるさかったな……

二人ともびつくりしたのか静かになってくれました

「れいちゃん〜！〜うた、これほしい！〜！」

「あ、おう」

「あつわりっ！！その指輪でいいんだな！？」

「えっあ……うん……」

おおの君といずみ君はレジへ向かう

せっかくだから聞いてみた

「うたちゃんはお兄ちゃん大好き？」

「うん！大好き！」

「そっか……お兄ちゃん、サッカー好きなの？」

「れいちゃんサッカーばかりしてるよ〜うたもサッカーしてるれいちゃんが大好きなんだ〜！！！」

……ふっ……

やっぱりサッカー好きなんじゃん！！

これは何としてもいずみ君に報告しなければ!!!

「おっおねえ…」

不適な笑み浮かべているのにきずいたうたちゃんは言葉を止めた  
いつときするとおおの君がやってきた

「うた、帰るぞ」

さっとうたちゃんの手を掴むと疾風ダツシユなみのスピードで店から去って行ってしまった

「あれ〜？大野の奴、行っちゃったか？」

泉君は悔しそうに店の外を眺めている

「大野君はやっぱりサッカー好きみたいだよ？」

「ああ!!!目を見ればわかる!!!」

……なんだ…わかってたのか…

ホントにサッカー好きなんだね泉君…

「秋!!!今日はイロイロごめんな!!!」

「うっん!楽しかったよ!ありがとう」

にしし!といったように笑い合う

「よし!!明日は大野説得頑張るよ!!!!」

「うん!!」

「秋!手出して!」

……ん?

私は泉君の言う通り手を出す

手の平の上に置かれたのは小さな紙袋

さっき買った指輪だ

「今日のお礼!!!!」

「うん……泉君ありが」

私が言いかけた時いきなり泉君の手が口をおおった

「秋!ありがとう!!」

……

……泉君は優しいなあ

「じゃ帰るか!!送るぞ?」

「うっん！大丈夫だから先帰ってて！」

「そっか？じゃまた明日な！！」

泉君の姿が見えなくなって私は近所の公園へと向かった

すぐそこにあったブランコに腰を落とす

別に用事があるわけでもないし…

かといってあのまま泉君といたら言ってしまうそうだった

本当の私の気持ちを

やっぱり好きだなあ  
…

心の中で呟いた

十、好きな気持ち（後書き）

秋はホントに泉のことが好きなんだな…が伝われば十分でござい  
ます

さあ！

早く耳直して小説頑張りーヨ！…だな（へ）！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3323/>

---

サッカー部記録書

2010年10月19日04時57分発行